

1) 自己紹介

参加者：1年 松本・山口・永井・山根

2年 渋谷・宮腰

3年 松田・金田・水田・北澤・山田

4年 石田・中島

5年 浅井

6年 中野

担任外 横江・小幡・森山・吉川 計19名

2) 提案：新しい学級で「学習集団」を一から作る 吉川

「聴く」ことの徹底を、授業開きにしようという提案。子どもたちの表情や目の動き、頷き・つぶやきなどを即座にとらえて褒め、具体的な見本を示していくことを、例を挙げながら話した。(資料1)

2) 教材解釈と授業展開を考える

1・2・3年と4・5・6年に分かれて、検討し合った。

- 1年 「あ」を読む・表現することに挑戦させる。以前、石井先生に教わった表現の授業を、入学後、早いうちにやってみる。この授業を行いながら、聴き方や対応の仕方、失敗や間違いを大事にしていくこと、人それぞれの違った表現を認め合うこと等、指導していく。
- 2年 光村教科書とびら詩「たんぼぼ」(まど・みちお)の授業。何人かに読ませて、「・・・お日さまのまごだから。」の語尾を上げる読み方と下げる読み方の違いに気づかせる。では、どちらの読み方が正しいのかを、ことばの意味を使って考えさせる。「ちょうちょうが、きいた。」の「きいた」の意味は、「耳を傾けた」なのか「たずねた」なのかを、この「 」が、誰のことばなのかを考えることによって、解決する。登場人物は、たんぼぼとちょうちょうだから、「 」は、ちょうちょうのことば。→「きいた」は「たずねた」→語尾を上げて読む。たんぼぼの嬉しい気持ちも「うふん」から読み取らせる。
- 3年 光村「どきん」(谷川俊太郎)の授業。各行に番号をつける(①~⑩)。題名にもなっている⑩の「どきん」に注目させる。「どきん」(「どきり」)は、「突然のことに驚いて、鼓動が一瞬激しくなりそのまま止まるかと思われる様子」なので、そこまで、驚いたのは、何に?と考えさせる。→「だれかがふりむいた!」から。→だれかがふりむいて、心臓が止まるぐらい驚いた理由は、何行目にかいてある?→手を挙げさせる。→⑤と⑨に分かれるか?→理由を言わせて、考えさせる。→自分が押して倒してしまったことを、引力や地球の自転や風のせいにして、足

音もなく急いでその場を立ち去ろうとしたときに、誰かに振り向かれて、（ああ！見つかる！）と思い、「どきん」としたのだというところに帰着させる。ここに帰着させる決め手が、まだ、見つからない。

○4年 光村「春のうた」（草野心平）の授業。「くも」が、「雲」なのか「蜘蛛」なのかを考えさせる。冬眠から覚めて、五感が徐々に戻ってきたかえるは、いいにおい（嗅覚）から、「いぬのふぐりがさいている」こと、「おおきなくもがうごいてくる」ことに気がつく（見つける：視覚）。近くのもの（いぬのふぐり）を判別することができた（視覚が戻ってきた）段階にいるかえるが、遠くの高い高いところのもの（雲）を見上げるというのは、あまりに飛躍しすぎて不自然ではないか？いぬのふぐりがさいていることに気づいた（目に入った）同じ目線で、そのちょっと先からうごいてくる大きめの蜘蛛に気づいて、獲物のうまそうなおいはこれだったのかと気づいて、活力が沸き上がるというふうに読む方が自然か？また、かえるから見て、雲の大小を比較するというのはどうなのか？雲は、かえるから見たら、どれも皆大きいのではないか？・・・決め手に欠けるか？

○5・6年 「クロツグミ」の詩の授業。クロツグミが何羽いるのかという問題を、句読点によって、解決させる。クロツグミがしゃべっているところに「 」をつけさせて、「 」がひとつなので、一羽だというゴールにたどりつかせる。

### 3) 各学年の学習の交流

今日、学び合ったことを交流した。

\* 解釈ができて、その学年の児童にわかりやすい授業展開を考えるのは、一筋縄ではいかないということを痛感。実践は、動画を撮って、記録を出し合うことにする。

（次回：4 / 24）

### 資料1

#### 新しい学級で「学習集団」を一から作る

2021.4.4

吉川恵美子

○さあ、新年度が始まります。皆さんは、今年度、どんな学習集団を作ろうと思っていますか。具体的に、いくつか書いてみてください。

○私は、学習集団作りの基本は、「聴く」ことの徹底だと思っています。もしかしたら、皆さんも、このことについては同じように思っておられるかもしれません。しかし、多くの授業を見せてもらってきた中で、このことが徹底されていて感心したという学級には、残念ながら、あまり出会ったことがありません。ほとんどの子が静

かにしていても、あるいは、先生の方を見ていても、(ああ、聴いていないな。)ということは、すぐにわかります。なぜなら、本当の意味で聴いている子は、必ず、何らかのリアクション(「対応」)をしているからなのです。頷いたり、つぶやいたり、笑顔になったり、目を輝かせたり、考え込んだり、驚いたり、困った顔をしたりと、絶えず、忙しく、聴いて感じたことを表現し続けています。しかし、たいていの学級では、たとえ私語や手遊びをしていなかったとしても、子どもたちの顔は、能面です。おまけに、私語や手遊びも、まだまだ、たくさん見られます。よく、先生方は、おっしゃいます。「徐々に、学習規律を徹底させていけばいい。」と……。しかし、これも、残念ながら、今日すぐに徹底させられないことは、学年末になっても、徹底させられはしません。(ああ、また、今年も、うまく徹底させられなかった。)と、毎年、反省してしまっている先生方も多いのではないのでしょうか。否、まだ、反省しているのなら、よい方です。驚くことに、多くの先生方が、あまり、自分の授業に悩んでいないというのが実際のところのようです。「授業中、静かだから良い。」「テストで、そんなにひどい点数ではないから良い。」「『先生。』『先生。』と自分のことを好いてくれているようだから良い。」と、さほど、日々の授業に悩んでいないようすです。ですから、研究会に誘っても、素っ気ない……。困っていれば、悩んでいれば、藁をもつかお気持ちで、誰かに訊いたり、さまざまな研究会に行ったりというような努力をしますが、多くの先生方は、結構、涼しい顔をしておられたり、自信を持っておられたりというように見えます。悲しいことです。

さて、今年は、この「聴く」ことの徹底をめざして、授業開きをしてみましょう。クラスの児童全員が「聴く」ことができることを目標にします。この「聴く」というのは、以下のポイントを大切にします。

- ① 話し手の方に体ごと向く。
- ② 「対応」しながら聴く。
- ③ 話し手の考えを理解しようと思いつつながら聴く。(考えながら、聴く。)
- ④ わからないことは、すぐに、質問する。
- ⑤ 聴き終わったら、自分の意見をつぶやく。

この5つを、1時間の授業で、徹底します。そのためには、できている子を徹底的にほめていきます。「あ。○さんは、話している人の方を向いて聴いている。これは、素晴らしい聴き方だ。みんなも、してみよう。やってみよう。先生が、『△さん』と言ったら、△さんの方をすぐに向いてね。△さん。あ、すごい！みんなが、○さんの聴き方になったよ。」「あ。□さんは、今、頷きながら、聴いていたよ。今話している人の意見が、自分とは違う意見でも、まずは、その人が、どんな意見を持っているのかを理解するために必死になって聴いてわかっていなければならない。頷くというのは、その人がどういう意見を持っているかがわかってきたよというサインだよ。□さんは、一生懸命聴いているから、頷けたんだね。じゃあ、次の人を当てるから、その人がどんな意見なのかをわかっていようと思って聴いてみてね。◇さん。…ああ、みんなが頷きながら聴けていたねえ。みんなが、賢い子になっていきそうよ、先生、うれしいなあ。」「☆さんは、◇さんの意見を聴きながら、にっこりしてたよ。もしかしたら、◇さんの意見と同じところを見つけてうれしかったのかもしれないね。◎さんは、『ああ！』って言ってたよ。何か発見できたのかもしれないね。こんなふうに、人の意見をよ〜く聴くと、いろんなことを頭の中で考えたり、いろいろな「対応」ができたりするものですね。今までのように、ぼんやりしたり、手遊びしたり、近くの人とおしゃべりしたりなんていう暇なんかないよねえ。これが、「聴く」ということです。」こうした具体的な良いモデルを示しながら、「聴く」ことを、1時間で徹底していきましょう。これをするには、学

級の子どもたち全員のことを隈なく見ていなければなりません。ちょっとした表情の変化や動作に気づいて、即座に褒めます。授業態度の良くない子ややる気のなさそうな子ほど、ちょっとした変化を褒めることで、授業に引き込むことができます。そういう子が乗ってくると、ほかの子への影響は絶大です。しかし、口先だけのほめ方では、子どもに見抜かれてしまいますから、ほめるときは、こちらが感動しながら心の底からほめてやるのが大事です。こうした感動は、その時間に、新しいクラスの子どもたちをいかに聴く子にしたいかという真剣さの度合いが高ければ高いほど、生まれやすくなります。子どもたちとの真剣勝負です。(必ず、全員を「聴く子」にするぞ!)という最大の心構えで挑んでいきましょう。

○「聴く子」にするためには、授業内容がおもしろいものでなければなりません。もちろん、この「おもしろい」というのは、「滑稽な」とか「下世話な」とか「ユーモラスな」などというものではありません。知的好奇心がすぐられ、価値観の大変化が起こり、「目からうろこ」を実感できる内容の濃い授業です。そして、教師サイドも、子どもからのどんなリアクションにも驚くことなく、迷うことなく、どんと構えて対応できる確かな解釈と構想を持っていなければなりません。今日の例会では、低高グループに分かれて、各学年の「授業開き」で使う教材を検討していきたいと思います。自信をもって、授業開きに挑めるよう、教材に向き合しましょう。

○「文学作品では論理的な思考力が育めない」というあきれた考え(別紙)→毎日新聞記事(高校の国語の教科書検定の記事)